


 書評

真柳佳昭 訳

脳の機能解剖と画像診断

齊藤延人

「頭部断層画像図譜」「神経解剖学書」「神経機能系解説書」三者の用途を備えた実用書

この度、「Klinische Neuroanatomie und kraniale Bilddiagnostik」が真柳佳昭氏の翻訳で医学書院から出版された。本書は 1986 年日本語訳発刊の『CT 診断のための脳解剖と機能系』と 1995 年発刊の『画像診断のための脳解剖と機能系』に続く第三版ともいえる最新版である。微妙なタイトルの変化が改訂の要点を的確に表している。本書の性格を要約すると頭部断層画像図譜であり、神経解剖学書であり、神経機能系の解説書である。三者の用途を一冊に備えた実用的な書であると言える。

第一章では獲得目標などが述べられており、本書を活用する前に目を通しておくといよい。第二章が「断層画像診断と目印構造」と題する本書の中心を成す図譜の部分である。A4 版の大きなページに 1 枚ずつ図が配置され見やすいばかりでなく、見開き 2 ページの左ページに図譜が、右ページに MRI が配置されていて、図譜と MRI を対比できるようになっている。MRI は T1 強調画像と T2 強調画像がおおむね交互に採用され、各撮影法での構造を確認できるようになっている。さらに図譜では動脈と静脈、末梢神経がそれぞれ赤、青、黄色に色分けされていてとても見やすいものとなっている。前額断、矢状断、軸位平面の各断面シリーズが記載され今日のニーズに応えており、ページの端は各断面シリーズで色が塗り分けられていて、該当ページの探しやすさにも配慮されている。また、脳幹・小脳は、Meynert 軸(正中線で第四脳室の底面を通る軸)に直交する厚さ 5 mm スライスの断面シリーズとして別に記されている。特に脳幹部分は拡大図も示され、その中にさまざまな神経核や伝導系が色つきで図示されている。近年の MRI 画像の進歩は脳幹内部の構造にも迫りつつあるが、時機を得た内容と言

える。

第三章から第五章では、各構造に焦点を絞ってさまざまな平行断面におけるトポグラフィーが解説されており、この部分は肉眼解剖学書の性格を有している。鼻腔と副鼻腔、眼窩、口腔などの顔面頭蓋と腔のトポグラフィー、頭頸移行部のトポグラフィー、頭蓋内髄液腔や脳動脈とその灌流域などの神経頭蓋、頭蓋内腔と頭蓋内構造のトポグラフィーなどが解説されている。

第六章は『神経機能系』と題した神経機能局在を解説する章である。例えば錐体路や聴覚系などを、普段われわれが目に見ている断層像でどこに位置しているのかを具体的に示してくれている。神経機能局在を解説するこれまでの成書でも伝導路などの概念的な説明図はあったが、断層像の中での具体的な位置を示している点は本書の大きな特徴である。一方で、断面のみでは分かりにくい各神経機能の全体像に関しても、統合的なシェーマとテキストを用いて解説しているので理解しやすい。また文中では解剖だけではなく機能局在や臨床への応用について、最近の知見に基づき踏み込んで解説している。全体的に文章が非常にコンパクトにまとまっているので、通読しても面白く、神経機能系を学ぶ手ほどの書としても役に立つ内容である。

繰り返しになるが、本書は単なる CT や MRI の図譜ではなく、従来の肉眼解剖図譜を元にした解剖の書に取って代わる、新しいジャンルの神経機能解剖学書に成長していると言える。前半はアトラスとして活用されるであろうし、後半は読んで学ぶことができる。座右の書として日常診療に役立たせたい。

(東京大学大学院脳神経外科学教授)

●A4 変型判 484 頁 2008 定価 21,000 円(本体 20,000 円+税) 医学書院